

Title	最近刊行の奥羽地方の地方史考古学関係文献紹介
Sub Title	Recent archaeological publications in Ou District or Northeast Japan
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.1 (1969. 8) ,p.119- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690800-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690800-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

最近刊行の奥羽地方の地方史考古学

### 関係文献紹介

江坂輝彌

近年地方史で第一巻として、その地方の遺跡遺物を紹介する考古編を企画するところが非常に多く、またその地の代表的遺跡の発掘調査報告を別巻として、一冊にまとめて刊行しているところもある。このような図書で、ここ二、三年に刊行されたものをまとめて本誌に紹介すれば、考古学方面の研究を志す人には多少役立てていただけることと考え、本誌の一端をかりて、私の目に止つたものを紹介する次第である。

奥羽地方では既に昭和三五年三月に秋田県史考古編がA5判四七一页、巻末図版五〇葉の大冊で刊行され、続いて三六年一月、岩手県史第一巻が上古篇・上代篇として刊行、県内発見の考古資料を紹介している。本書もA5判八六〇頁、巻頭図版四〇頁の大冊である。

宮城県史は前記二著より古く昭和三二年に刊行され、第一巻の最初の項に、東北大学文学部の伊東信雄教授が『古代史』として『第一章繩文式文化時代』から『第五章平安時代』までを、A5

判の図書の一七一页を使つて執筆されている。関係巻頭図版は一九頁ある。

また青森県史は戦前の旧版のみで、新刊の計画はまだないようで、県内の豊富な考古学資料を紹介した図書はない。山形県史第一巻考古編は山形大学教育学部の柏倉亮吉教授が現在鋭意執筆編纂中であり、前記二著や後記の福島県史1、6などにも勝るとも劣らぬ好著が今年度中に刊行されるものと期待される。

福島県史は第6巻 資料編1 考古資料が先ず昭和三九年三月に発刊になつたが、本巻はA5判 原色図版一一、アート図版四〇〇頁余 本文六三頁 福島県遺跡地名表一七九頁で、福島県遺跡・遺物写真集とも言うことのできる図書で、福島県内の出土資料を知るには便利な著書である。

福島県史 第1巻 原始・古代・中世編 通史編1は四四年三月発刊になつた。ここでは近刊のこの著書について、少しく詳細に紹介する。本書はA5判 布装 口絵カラー図版五頁、アート図版一四五頁、本文一〇八八頁の大冊で、巻頭のカラー図版と一四五頁のアート図版は本文とは関連なく、前記した第6巻 考古資料の続として、補足「考古図録」として掲載したものである。カラー図版一頁は相馬郡鹿島町上柄窪(旧上野村)出土の人體文様のある繩文中期、大木9式深鉢で、珍らしい資料である。二頁と三頁の見ひらきには赤バックに、河沼郡柳津町石生前遺跡出土の馬高式的完形深鉢土器の上半部をアップで掲載している。

この写真的構図は昭和三九年三月、講談社刊・日本原始美術1

一四五図版の長岡市関原町馬高遺跡出土の火炎土器の胴部上半を二頁見ひらきにしたのを模倣したものであろう。

阿賀川上流地域の会津盆地では大木8a・8b式土器とともに、馬高式土器的なものがあることを物語る好資料である。アート図九四七に底部までの全器形を示す写真が掲載されている。

カラー図版四頁と五頁には昭和四二年一一月、双葉郡双葉町清戸迫(きよとさく)で発見された一横穴古墳の奥壁に描かれた、丹彩壁画が掲載されている。この新発見壁画については、昭和四年一月二〇日、二一日、いわき市湯本、常磐文化センターで開催の第一〇回福島県考古学会大会で、渡部晴雄、梅宮茂氏らの調査結果に対する研究発表があり、同年四月二九日、東京都杉並区和泉の明治大学和泉校舎で閉催された日本考古学協会第三四回総会の際の研究発表でも梅宮氏が「東北地方南部における装飾古墳の一考察——泉崎・清戸迫横穴壁画の解説を中心として——」と題する興味ある研究発表を行つてゐる。またこの壁画は注目すべき図柄であり、同年七月一四日発行の朝日ジャーナル一〇巻二九号にも「みちのくの装飾古墳」の表題で、見ひらき二頁のグラビア図版で紹介されている。中央に七重の径八〇センチの大渦巻文があり、この渦巻文の向つて右に左手を斜め上方にのばし、右手を腰にあてた甲冑に身をかためた人物が大きく描かれ、その右の右端には騎馬人物が描かれている。また渦巻文の向つて左には太口袴をつけ冠帽をかぶつたと思われる人物像が同じ丹一色で描かれている。大きく描かれた渦巻文両側の人物像の間、渦巻文の下

には左に弓を構えた人物像、この弓矢の先方には犬、子鹿、牡鹿などの動物が描かれ、当時の狩猟の状況を描いたものと想像される。また壁画の左端にも犬か猪を思わせるような獸が描かれている。壁画古墳の模写と研究で著名な日下八光東京芸術大学名誉教授は、この清戸迫横穴古墳の壁画は、被葬者の日常生活のさまざまの様子を描写したものではないかとの意見を述べられているが、実に卓覧で、おそらく被葬者の日常生活を物語る絵巻物であるかとも考えられるものである。このような貴重な資料を巻頭にカラー図版として収められたことは、非常に有意義で、今後の調査研究に引用者には好都合なものである。

アート図版は最初の三頁が旧石器関係の追加資料、四頁と六頁が縄文文化早期の資料、七と九頁が前期の資料、一〇頁と四六頁までが中期の資料、四七頁と五三頁までが後期の資料、五四頁から六二頁までが晩期の資料(晩期の資料中には同一遺跡出土の後期の資料も掲載)六三頁と九二頁までが弥生文化資料、九三頁と一三〇頁までが古墳文化関係資料、一三一頁から一四五頁まで歴史時代資料で、その掲載資料の終末は鎌倉時代頃であろうか。巻末に第六巻、考古資料補足考古図録 個別解説がある。

本文は第一編 原始時代。第二編 古代。第三編 中世。と三編よりなり、第一編は序説「自然の形成」「原始時代の概要」、の序説に始り旧石器時代、縄文時代、弥生時代と三章に区分、主として日黒吉明氏が執筆しているが、一部、金子浩昌、中村五郎、馬目順一、渡辺一雄、渡辺誠氏などが分担執筆している。

古墳時代は第二編 古代。に第一章古墳と国造の形成。とし、「本県の古墳文化」「国造と古墳文化」「古墳時代の生活」と三節にわけて梅宮茂氏が執筆している。第二章 国郡の設置。は「陸奥国の成立と郡郷」「陸奥の経営と福島県」の一節を佐藤堅治郎氏が執筆、第三節 奈良時代の文化。を梅宮氏が執筆している。本書の前半は福島県下の考古学の諸問題について調査研究をこれからおこなおうとする人にとっては、恰好な手引書である。(定価 300円)

次に今年三月三一日付で発刊された(実際には六月発刊)福島市史 第6巻 原始・古代・中世資料(資料編1)を紹介する。

本書もA5判 布装で、巻頭にカラー図版八頁、次に凡例、目次を入れてその後がアート図版になつており、アート図版は一四四頁である。本文は前記図版に掲載の遺物、出土遺跡の解説を第1編 考古個別資料。として二〇頁にわたつて記している。以下は、第2編 古代記録。第3編 中世文書。第4編 金石文。第5編 城館・社寺・文化財一覧。とわけ、この後、解説。という項目を設け、1考古。2古代記録。3中世文書。4金石文。5城館・社寺。と各時代の通説を記している。そして最後にカラー図版、アート図版に対する「資料目録」を付している。以上で本文は三九〇頁である。

本書はカラー図版のトップに最近市教育委員会の所蔵となつた同市飯坂町東湯野上岡出土の立膝して腕を組む縄文文化後期末の土偶を掲載しているが、印刷技術の不手際のためか、実物とはほ

ど遠い色に印刷されているのは大変残念である。二頁には中期の大木8a式土器の上半部を上段に掲げ(飯坂町中野字月崎出土)下段には旧信夫村音坊遺跡出土の中前期前半の時期の土偶、縄文文化早期の石槍(市内渡利出土)などを掲げられ、三頁には飯坂町穴田出土の猪形土製品、飯坂町湯野字大舟出土の弥生時代の包丁形石器、渡利字扇田出土の弥生文化後期の土器、島谷野出土の土師器などが掲載され、四頁には市内下島渡の稻荷塚古墳の遠景写真、黒岩字浜井場古墳出土の鍍金が美しく残つている鍔をはじめとする主頭太刀の外装の一部。山口の赤埴第1瓦窯跡の瓦の出土状態などの写真が掲載されている。以下には歴史時代の仏教関係の資料などが掲載されている。

アート図版は最初の三頁が「無土器」と記し、旧石器時代の石器類の写真を掲載している。二頁の上段に掲載された田沢字貝沼出土の局部磨製石斧二点は長野県神子柴、青森県長者久保遺跡出土の局部磨製石斧に対比すべき、旧石器文化の終末にあらわれる石器と思われる。この資料の一点は福島県史6 考古資料 アート図版一一にも掲載されている。

三頁には市内各地出土の尖頭器 有舌尖頭器類が一二点掲載されているが、この中の一〇点は前掲、県史6のアート図版一二にも掲載されているもので、県史では縄文文化の第一頁にしている。このうちで渡利ザラメキ、と渡利長新田出土のものなどは土器出現直前のものか、最古の細隆線文土器に伴出の有舌尖頭器ではないかと考えられる。福島市内にも以上のような最古の土器文化へ

の過渡期の遺物が発見されていることは興味深い。

縄文文化以降の資料も、編年順によく整理して掲載されている。本書の考古学関係の項目の編集、執筆は梅宮茂氏である。(頒価二〇〇〇円)

福島県関係の近年刊行の市町村史で考古学関係にかなりの頁数を割いたものは、このほか昭和三四年二月刊の概説平市史(A5版 七三七頁)があり、最近発刊のものでは昭和四三年四月刊行の原町市史がある。本書はA5版で、考古学関係は第一章先史時代、第二章古墳時代と二章 六八頁にわたって(五頁~七二頁)記している。執筆者は竹島国基氏である。

前記した岩手県史第1巻も布装幀 A5版 卷頭アート図版四〇頁 本文八六〇頁の大冊であるが。本書の上古篇の図版、挿図写真などが秋田、福島両県史などに比較すると見劣りがする。考

古学研究家は写真技術もかなり上手な人が多いが、本書の上古篇執筆、編集を担当した、当時県史編さん係主事であつた小岩末治氏は独学で考古学を勉強していた篤学の士であり、図版、挿図の編集があかぬけたところがなく、泥臭さがあるのも万止むを得ぬことであろう。本文も彼なりに忠実に記載しているが、やはり同様な弊害が目につく。上古篇では旧石器文化から弥生文化までを三頁~三四二頁にわたって記している。古墳文化は上代篇の第一章として執筆され、第五章 安倍氏辺境在地勢力の没落までの項は岩手大学教育学部の板橋源教授が執筆されている。そして最後の 第六章 平泉藤原氏辺境在地勢力の確立。を県史編さん係長

の田中喜多美氏が執筆している。

また盛岡市史はこれより早く昭和三二六年六月、第一編が刊行され、岩手大学の板橋源、草間俊一教授らが執筆を分担している。岩手県内の市町村史で近刊のものとしては北上市史 第一巻

原始・古代(一)がある。本書は奥付には四三年三月末刊となつてゐるが、実際に発刊されたのは同年の一二月末である。A5版 布装幀 卷頭アート図版2 本文四九六頁 本文中へ挿入アート図版 無土器(旧石器)六頁。縄文、一二四三頁。弥生、九頁、古墳、四頁。歴史、六七頁。彫刻・工芸、二八頁。参考資料図版、一頁。このほか巻末に折込遺跡分布図 折込編年表がついている。本書は厖大な写真図版が手際よく整理されており、本書の編集を担当された司東真雄、菊池啓治郎、沼山源喜治氏らの苦心の跡がしのばれる。

また本書は「考古資料」編として刊行されたもので、まず最初に無土器時代。縄文時代。弥生時代。古墳時代。歴史時代の順で一三頁にわたって簡単な概説を記している。次に鈴木孝志氏が「北上川中流域の無土器文化——北上市周辺の遺跡——」の表題を付して、旧石器文化の項を分担執筆している。縄文文化の項では昭和二七年、まず岩手県教育委員会から発刊の文化財調査報告第二集に筆者などで執筆の「江刺郡稻瀬村樺山遺跡調査予報」の記事を再録、つづけて昭和二九年刊、文化財調査報告第三集として刊行した「江刺郡稻瀬村樺山遺跡」も再録、次に昭和四二年七月二一日から八月二六日まで実施した樺山遺跡の調査成果の概

要を北上市教育委員会より、昭和四三年三月「北上市稻瀬町樺山遺跡緊急調査中間報告」として刊行したものも再録している。これらの中間報告により樺山遺跡の性格のほぼ全貌が把握でき、研究者には便宜な企画である。

樺山遺跡の報告書の再録の後へは菊池啓治郎氏執筆の「北上市帰帆場遺跡」草間俊一教授執筆の「北上市更木町臥牛遺跡」「北上市相去町和田前遺跡」などの概報が続いている。

弥生・古墳・歴史のアート図版の後には菊池啓治郎氏が昭和三〇年度の「日本考古学年報3」に報告した「A—D号土師堅穴住居跡」が再録され、続いて菊池、草間氏により「北上市常盤台遺跡」が執筆され。その後には菊池氏の「北上市二子町秋子沢遺跡調査報告（第一次）」桜井清彦、玉口時雜両氏による「秋子沢遺跡調査報告（第二次）」斎藤尚己氏の「北上市相去町三十人町遺跡調査報告」沼山源喜治氏の「北上市相去町葛西壇遺跡発掘調査報告」「北上市出土土師器考——北上川中流域を中心として——」など原史時代から歴史時代初頭の土師器、須恵器、綠釉陶片など出土遺跡の調査報告が続き、その後、板橋源、司東真雜、佐々木博康共著の「北上市稻瀬町極楽寺遺跡調査略報」「北上市更木町大竹廃寺跡調査略報」。滝口宏教授が雑誌「古代」七号、昭和三〇年に報告した「黒岩白山廃寺」の再録。司東真雄氏の「白山寺の建立年代と建立の思想——清原氏文化の拠点か——」。最後に故小田島禄郎氏が昭和九年、南部史談九号、一〇号に掲載された「歴史時代より藤末に至る文化流入の経路と普及状態」を再録、歴史

考古学の分野の記載を終つてある。次に参考資料として、北上市の西に隣接の江釣子村所在の猫谷地・五条丸古墳群、岩手史学研究、県文化財調査報告などに発表のものを再録している。本書は生の原稿と、諸種の図書に過去に報告されたものを併せ掲載している。地方史の考古学関係の資料編としては、非常に時機を得た編集方法である。なお本書は原則として分売しない方針とのことであるが、考古学研究者の要望に答えて本書一巻のみは若干余分につくられているので、頒布価二〇〇〇円で分売するよし、北上市役所秘書課長、菊池啓治郎氏まで問合せられたい。

また秋田県史 考古編は、前記した県史同様、A5版 布装幟で、巻頭にカラー図版二頁があり、本文は四七三頁。本文中に縄文前期 中期土期片拓影。土師器実測図。払田柵跡実測図。墨書き土師、須恵器実測図などの折込図が挿入されている。巻末アート図版は五〇頁。本書は巻頭、巻末図版とも一面印刷で裏白している。また本書は巻頭の序言に藤田亮策教授が「秋田県の先史時代と歴史時代初期については、大和久震平、奈良修介両氏の、永年の考古学的研究の成果がまとめ上げられたもので、到底他の人を以てしては望み難い程に系統づけられている。近年続々と刊行されて来た県史・市史の考古編が、祖先を石器時代の昔まで掘り下げて検討し、これを学問的にまとめてゆくことに特色があり、大正時代の県史・町村史の羅列式記述のそれと著しい差異を示している」と記されているが、昭和二七、八年頃から以後に編纂の地方史では、その地方の遺跡・遺物の系統的研究にもかなりの貢

数を割き、一〇巻を越す大規模なものでは考古編も概説と資料編の二巻ぐらいをしめるものがあり、大正時代から昭和の前半に編纂企画された地方史とはかなり趣きを異にした特色のあることを述べられている。本書は序言にも記されているように、大和久震平、奈良修介両氏の共著であり、執筆分担は明示されていない。目次を紹介すると

第一部、原始時代。第一章、研究史。一、旧考古学の系譜。二、近代考古学の展開。三、遺跡地名表。四、文献目録。第二章、無土器文化。一、研究の趨勢。二、県内の資料。第三章、縄文文化。一、土器編年。二、縄文文化の変遷（前半）。三、縄文文化の変遷（後半）。四、生活と環境。第四章、弥生文化・続縄文文化。一、概観。二、県内の資料。と第一部の大項目を区分し、一頁（一六二頁）にわたつて記述している。「旧考古学の系譜」では江戸時代以前の県下の遺跡・遺物の研究史について記し、菅江真澄（一七五四～一八二九）の著した「新古祝賀品類之図」（大館市立図書館蔵）「美香弊乃誉路臂」（秋田県立図書館蔵）などの著書を紹介し、その中の土器の図を転写再録してあるものなど、原著を秋田まで見いでかけられない研究者にとっては便宜なものである。また第四節の文献目録には県内関係の明治以降の文献のみを収録しているが、江戸時代以前の文献も併せて収録して欲しかった。

第二部、歴史時代。は、第一章、奈良平安時代。一、総説。二、末期古墳—遺跡と遺物。三、土師器・須恵器の編年。四、火葬

墓。五、窯址。六、堅穴住居。七、城塞遺跡。附、銅製三鈷鉛。第一表、古墳地名表。第二表、火葬墓地名表。第三表、土師器・須恵器出土地名表。第四表、古瓦出土地名表。第五表、木柵及木柱出土地名表。第六表、窯跡地名表。第七表、墨書土師・須恵器出土地名表。第八表、へら書銘土器出土地名表。第二章、藤原・鎌倉時代。一、経塚。二、古鏡出土地。三、仏像。四、藤原・鎌倉時代文化の分布。第九表、藤原時仏像一覧表。第十表、藤原鏡出土地地名表。第三章、鎌倉時代後期及び室町時代。一、石造物。二、懸仏。三、室町時代館址。四、室町時代以降の経塚。五、紀年銘のある遺物。などの項目があり、系統的に非常によく編集された好著である。「室町時代の館址」では鹿角郡柴平村小枝指七館の調査を中心として、大和久氏が簡潔な短篇にまとめているが、同氏が秋田県在住中には、かなり熱心に踏査研究を続けていた部門であり、今少し核心にふれて欲しかつた。また今後の研究の問題点のようなものも記されれば、後進の研究者の指針ともなつたと思われる。

青森県ではまだ新たな県史発刊の計画はないようである。現在考古編を一書にまとめようとの計画で編纂が進められているのは青森県下では八戸市史のみであろうか。音喜多富寿氏の指導で、市川金丸、栗村知弘氏らによつて執筆が進められている。また昭和四〇年三月発刊の「中里町誌」（北津軽郡）には、第一五章、郷土の生長、第三節、中里町に於ける藩政以前の史料。の中に、成田末五郎、佐藤達夫、渡辺兼庸、佐藤仁氏などの共著の形で、成

「深郷田遺跡発掘概報」を七八一頁と八〇一頁にわたつて、記載している。この調査は農林省による十三湖干拓工事に伴い、深郷田台地先端部が宮野沢川の護岸工事で、削り取られることになつたため、町誌編纂事業の一環として、事前発掘調査を昭和三七年四月一六日から二〇日までと、同年一〇月二二日から二九日までの二回にわたつて行つた、この調査成果の報告である。まず白崎高保氏によつて、この地方の前期初頭の形式として設定された深郷田式土器の究明、次にC地点で発掘した前期の円筒土器下層b式土器の円形プランの堅穴住居址の調査成果（貝塚を伴う）またE地点では糸切り底の土師器の時代の堅穴住居址を発掘していく。青森県下で円筒土器下層b式土器の時期の堅穴住居址が完掘されたのは本例が始めで、奥羽北部における円筒土器の文化圏においても恐らく始めての例と考えられ、貴重な成果である。

最後に市町村史の別巻として刊行された代表的調査報告を一、二紹介しておく。まず東北大学文学部の伊東信雄教授と伊藤玄三氏の共著である「会津若松史 別巻1 会津大塚山古墳」が第一にあげられる。本書はB5版 布装幀、巻頭カラー図版八頁（一面印刷）本文一七一页 付編 大塚山古墳用語解説八頁 卷末グラビア図版 一面刷り三三図版の大冊で、昭和三九年九月の発刊である。（定価二五〇〇円）

本古墳は会津若松市の市街地の北々東約二・五キロの丘陵上にあり、主軸の長さ九〇メートル、後円部直徑四五メートル、高さ六メートル、前方部の高さは三・五メートルという、前方部の低

い古式古墳の特徴をあらわした大古墳であつた。発掘調査は昭和三九年五月一四日から二八日まで、一五日間にわたつて実施され、後円部には南、北に併行して二棺が発見され、南棺からは彷彿三角縁唐草文帯二神二獸鏡、一面。変形四獸鏡、一面。硬玉製勾玉、一。碧玉製管玉、七九。琥珀製算盤玉、二。ガラス製小玉、六一。同破片、三一。櫛、二。素環頭鉄大刀、一振。鉄直刀、一振。鉄劍、七振。鉄小刀、一振。銅鏡、二九。鉄鏡、四八。鞞、一。鉄斧、五。鉄鎗、三。鉄刀子、二。棒状鉄器、三。砥石、一。石杵、一。台石、一。丹、若干。が発見され、北棺からは捩文鏡、一面。碧玉製管玉、四〇。碧玉製紡錘車、一。鉄直刀、一振。鉄劍、五振。銅鏡、四。鉄鏡、四一。鞞残片、一個体分。鉄斧、二。鉄刀子、一。が発見された。このようにおびただしい副葬品が收められた前期古墳が会津盆地から発見されたことは、考古学上幾多の重要な研究課題が提起されたことになり、本報告でも伊東信雄教授が興味ある見解を示されている。本報告については紹介したいことも多いが、紙数の関係もあり割愛する。

また福島市では昭和四〇年六月、福島市史編纂準備委員会から福島市史資料叢書特集として、伊東信雄、伊藤玄三、内藤政恒氏らの共著で市内腰浜町所在の腰浜廃寺の調査報告である「腰浜廃寺」が刊行されている。同書もB5判 布装幀で、巻頭カラー図版四、本文一二五頁、卷末図版六四頁（裏白）、付録腰浜関係史料、二二頁という大冊、豪華本である。（定価 一六〇〇円）

本書には昭和三六年三月一日と八日および同年一一月二〇日か

ら二八日と二回にわたつて調査を行つた腰浜廃寺の調査成果と、同廃寺関係の瓦を焼いた福島市岡島字笠の森小字宮沢所在の宮沢瓦窯跡（昭和三八年三月八日～一五日調査）と、同市山口字赤埴所在の赤埴瓦窯跡（昭和三九年三月一六日～二一日）の調査成果が掲載されている。

伊東教授によると腰浜廃寺はその出土瓦などからみて八世紀後半、奈良時代後期の創建で、九世紀後半の平安朝前期にも引き続き栄えていたことが、型押花文瓦が沢山出土することから明らかであるといわれ、また腰浜廃寺出土の瓦の文様は腰浜に独特なもので、少くとも多賀城・陸奥国分寺・同尼寺・胆沢城などから出土する陸奥の国府系の瓦の文様とは異質的なものであるといふ。したがつて腰浜廃寺の建立者は陸奥国府とは関係の薄かつた人だ、その寺院は官寺ではなく私寺であつたと見るのが妥当であろう。と記されている。そしてその遺瓦の出土地域のひるわ、出土の瓦の華麗さ、鷁尾の出土した事実、附近の三本木から天平様式の立派な菩薩面が出土したことなどからして、腰浜廃寺はかなり豪壯な寺院であつたと推察され、このよだな寺院が存在したことは奈良時代後期から平安前期にかけての福島地方の社会的・文化的成熟がかなり進んでいたことを示すものである。しかむこの寺院が私寺と見られることは奈良時代後期から顯著な社会現象となりつてあつた地方豪族の怡頭を物語るものとして興味深い。と述べられてゐる。また腰浜廃寺の花文系の瓦の文様は、高勾麗系の色彩が強いという。帰化人の造瓦への参与が当然考へられ、福島

地方と帰化人の結びつきは従来文献的研究では知られていないなかつたところだ、これも腰浜廃寺の発掘調査の成果がもたらした新知識の一つである。と記されている。以上福島県下では奥羽南部の古代史との密接な結びつきが考えられる一報告書が市史の別巻として刊行されてゐるので併せて紹介した次第である。

R. G. Collingwood and R. P. Wright,  
the Roman Inscriptions of Britain, I,  
Inscriptions on Stone, Oxford Clarendon Press, 1965.

## 小川英雄

英國古代史のうち、ローマ帝政期は西暦紀元後一世紀から五世紀まで続くが、その主要な史料は Tacitus 等当時の歴史家たちの著述と考古出土物である。ローマ帝国内における英國の地理的位置から考えて、前者が比較的乏しく、その時代の研究にとって後者の比重はきわめて大きい実状にある。従つて、遺構や遺物は勿論であるが、文字による考古史料、即ち碑文はそれ等と文献史料の中間的存在として特に大切である。

英國におけるローマ帝政期の碑文の研究は、一六世紀以来歴史愛好家たちの手によって行われてゐた。W. Camden, J. Horseley, J. Hodgson, R. Cotton, W. Stukeley 等が各地に知られ